



ルポ
2

微生物資材を含んだ堆肥は発酵速度が速く良質に仕上がる。左側のレールでできた堆肥を、右側のレールで戻し堆肥にする



完成した堆肥。稲作に多く活用され、地域に還元している



が、牛床はベタっとしておらず、乾きすぎてもいい。さらに、臭気はほぼ感じられない。牛舎に雨風が吹き込むのが避けられないなか、良い状態を保つには何が重要なのか？

のために新平さんが重要視しているのは、ロータリーでの攪拌をじっくり深く行なうこと。攪拌が不十分だと敷料が発酵しきらず、状態が不安定に。乳頭など少し汚れているのを確認すると、牛床の良し悪しがわかるという。

良い状態が保たれているのは微生物資材も重要であり、良い菌による発酵促進と、バーミキュライトの吸水作用が働くので、雨や雪などで一時的に牛床が濡れてしまってもすぐに回復できるから。

重要なのは、長い目で改善を繰り返すこと。微生物資材は、使い始めてすぐに効果が出るわけではない。すぐに効果が出ずに入止した農場もあるが、長期的に使い続けることで、徐々に菌が定着し、牛床の質が改善され、堆肥の質も良くなってきた。

新平さんは今後、冬場の牛床、堆肥それぞれの発酵促進を課題としている。外気温が下がるので、なかなか温度が上がらず発酵が不十分となることがある。ロータリーをより深くかけるか、微生物資材を増やすか、対策を検討中だ。

牛も人も、まずは良い環境から

牛床を改善して変化したことは匂いだけではない。牛がよく寝るようになり、ストレスが低減され蹄病に罹患する牛が以前に比べ減少した。乳房炎においても同様で、前述のように牛床の環境が改善され、乳房炎も減少した。夏場は発酵熱も相まって牛床の温度が上がりがちだが、微生物資材のおかげで表面はすぐに熱が発散され、夏場でも牛は横臥するように。牛の生産性だけでなく新平さん自身も「臭くない農場で働くのは気持ち良い」と感じている。取材時、コンポストバーの敷料を手に取って調べてみても匂いは感じられなかった。「匂いについては口で説明してもなかなか伝わらないが、実際に来て感じてもらうと皆驚く」と新平さん。自身もこの環境には満足している。

酪農のイメージ向上へ

良い敷料から出た堆肥は発酵が速く、やはり良い状態に仕上がる。できあがった堆肥は戻し堆肥として搾乳牛舎、育成・乾乳牛舎に使用するほか、近隣の稻作農家やいちご農家、家庭菜園で使用する人などに供給している。牛床改善に取り組んでから同時に試行錯誤し、数年かけて今の堆肥にたどり着いた。今では自身の圃場に散布するぶんが足りなくなるほどに堆肥が利用されている。

那須町には農場が多く集まっているが、避暑地・観光地として宿泊施設や別荘が並ぶ地域である。畜産農家全体で臭気対策をはじめ周辺環境への配慮が不可

欠だ。これからも酪農が地域で存続するために、より必要としてもらえる農場となるために、新平さんは極力臭気を抑え、酪農場の環境を整え、酪農のイメージ向上に向け取り組みを続ける。

(取材=前田真)



牛床に散布する微生物衛生資材「VSバイオ」



「最近は酪農ヘルパーを頼み、趣味など自分の時間を楽しむようになっている」と新平さん



牛体の汚れや匂いの変化で、牛の異変、環境の変化に気づくようになった